

医療保育科学生の入学から卒業までの各実習における子ども観の変化

岡 田 恵 子

A Study of a Change in the Images of Children by Nursing Childcare Students in Each Practical Training from Enrollment to Graduation

Keiko OKADA

キーワード：医療保育科，実習，子ども観

概 要

本研究は、本学医療保育科学生の子ども観や子どもへの親和感情が在学3年間のさまざまな実習でどのように変化したのか、3年間を通してその変容をみる目的で行われた。その結果、子ども観や子どもへの親和感情は健康な子どもと関わる保育所実習や幼稚園実習の後は肯定度が高く、逆に、生活課題、健康障害、発達障害などのかかえた子どもと接する施設実習や小児病棟実習・発達障害児保育実習後は肯定度が低くなることを見出された。医療保育科学生の子ども観や子どもへの親和感情は対象児の特性や状態にまだまだ左右されていることがうかがえた。今後これらの実習を通し、子どもの厳しい現実も知った上で、さらに子どもに対する理解や共感が広がるような教育を行うことが望ましい。

I はじめに

本研究の目的は、本学医療保育科学生の入学から卒業までのさまざまな実習で、学生の子ども観、子どもへの親和感情、および心理社会的発達がどのように変化したのかを、在学3年間を通して調査し、医療保育科学生の実習後の子ども観等の変容を全体からみてゆくことである。

今まで医療保育科においては、教育や実習の特性および各実習後の短期効果を測る目的でさまざまな研究が行われてきた。例えば医療保育科学生の「入学動機」¹⁾、「就業自己イメージ」²⁻⁵⁾、「子どもイメージ」⁶⁻⁷⁾、「生活支援に関する自己効力感」⁸⁾、「医療に対するイメージ」等⁹⁻¹⁰⁾の変容を通し、それぞれの実習効果に関する考察を進めてきた。

しかし、医療保育科学生にとって各実習は単独で終わるものではない。3年間のすべての実習が関連し合っ

て行われる。したがって、短期の実習効果や医療保育科学生の変容をみるだけでは足りないと考えた。そこで在学3年間を通して医療保育科学生の子ども観や子どもへの親和感情の変化の全体をつかみ、今後の保育士養成教育に生かすことは意義あることと考え、本研究ではすべての実習を通して医療保育科学生の変容をみることにした。

菅¹¹⁾が述べるように、保育者が子どもについてどのような捉え方をしているかという子ども観は、保育者の保育観やそれに基づく具体的な保育行動をさまざまなレベルで規定している重要な資質である。子ども観の内容により子どもの受容のされ方が異なるなど、子ども観は親、社会人といった大人一般の子どもに対する行動も規定している¹¹⁾。一方、子ども観は社会的な時代背景の影響を受け、かつ、それまでの子どもとの接触体験、実習体験、個人の特性、生育環境などの個人的な要因と複雑に絡まり合いながら、様々に変化し得るものでもある¹²⁾。これらの理由から子ども観は広義に捉えられ、大学生にとってはその意味内容が明確でないおそれがある¹¹⁾。そのため子ども観という用語を使わず、子どもについてどのような捉え方をしているかを「子どもイメージ」という用語を使い調査している研究もある¹³⁻¹⁴⁾。水島¹⁵⁾が「イメージとは認知の

(平成22年10月15日受理)

川崎医療短期大学 医療保育科

Department of Nursing Childcare, Kawasaki College of Allied Health Professions

枠組みを形成したり、行動統制的役割を持っている」と述べているように、学生のもつ子どもイメージは、保育を実践する上で子どもとの関わりの質や自らの保育行動にさまざまなレベルで影響を及ぼすと考えられる。そこで筆者も学生の子どもの観を「子どもイメージ」という表現を用いて調査を行なうことにした。

さらに Erikson が精神分析的個体発達分化の図式にそって8つの発達課題を提唱した心理社会的発達を調査し、医療保育科学生の3年間の心理面の発達程度の変容も全体からみたいと考えた。学生の変化や実習効果をみる上で、学生の個人的資質である心理社会的発達に応じた指導をすることが望ましいことが見出されている¹⁶⁾。小児看護実習においては、心理社会的発達が高い学生ほど実習での充実度が高く、子どもイメージも高いと述べている研究¹⁷⁾もある。Erikson が、人間は社会や環境との相互作用を通して、能力や成熟といった心理社会的発達がもたらされると述べているように¹⁸⁾、心理社会的発達は実習効果との関連性が推測される。本研究では両者の関連性を検証するまでにはいたらないが、医療保育科学生のすべての実習後の子どもイメージ、子どもへの親和感情および心理社会的発達の3年間の変化を調査し、これらを通して医療保育科学生の変容の全体をつかみ考察したいと考えた。

Ⅱ 研究方法

1. 調査対象者と調査時期

調査対象者は、平成17年4月に本学に入学した保育科学生1期生77名のうち、全調査に回答した71名が有効分析対象者である。

今回比較するデータは、まず入学時の平成17年6月30日、次いで2年次6月に保育所において健康な子どもたちとかかわる保育所実習後の平成18年7月4日、次いで2年次9月の乳児院、児童養護施設、知的障害児施設、重症心身障害児施設、知的障害者更生施設等の児童福祉施設等で発達障害や生活課題をかかえる児童や障害者とかかわる実習（以下、施設実習と略す）後の平成18年9月27日、次いで2年次12月の保育所実習か施設実習を選択する選択実習（選択実習と略す）後の平成18年12月20日、次いで3年次5～6月の幼稚園実習後の平成19年6月27日、最後に本学独自の小児病棟実習・発達障害児保育実習後の平成20年1月21日の6回にわたり調査したものである。小児病棟実習は小児病棟で10日間、病児施設で2日間の実習、発達障害児保育実習は発達障害児施設等で週に半日、約3ヶ

月にわたる実習を行う。これらは今日ニーズの高い健康障害、発達障害のある子どもたちと向き合い、一人一人の成長、発達に応じたより適切な支援を行なうため医療の専門性を身につけた保育士・幼稚園教諭を養成することを目的として設定された本学独自の实習であり、医療保育科学生はどちらかを選択する。

2. 調査方法

調査は、研究の趣旨に同意し協力の得られた医療保育科学生に、授業後質問紙による一斉調査を行った。その際、個人のプライバシーが漏れることがないこと、研究目的以外には使用しないこと、回答は任意であることなどを伝え倫理的配慮に留意した。

3. 調査内容

(1) 子どもイメージ

SD法を用い、プラス・マイナスの子どもイメージを表す形容詞対23項目を、どちらにより近いのか7件法で測定し、得点化した。先行研究⁶⁾で因子分析の結果、「意欲的な—無気力な」「明るい—暗い」「積極的な—消極的な」「元気な—疲れた」「陽気な—陰気な」「活発な—鈍感な」「敏感な—鈍感な」「外交的な—内向的な」などの子どもの活動的イメージ因子Ⅰ、「理解力のある—理解力のない」「きちんとした—だらしない」「頼もしい—頼りない」「安定した—不安定な」「たくましい—弱々しい」「言うことをきいてくれる—言うことをきかない」「まじめな—ふまじめな」などの子どもの性格に関するイメージ因子Ⅱ、「かわいらしい—にくたらしい」「好きな—嫌いな」「気持ちのよい—気持ちの悪い」「良い—悪い」の対子ども感情イメージ因子Ⅲの3因子が見出されている。なお、回答の際、イメージする子どもは、小学校入学前の幼児を想定することと伝え、得点が高いほど子どもイメージの肯定度が高いと考えた。

(2) 子どもへの親和感情

「子どもと遊びたい」「子どもを抱っこしたい」「子どもに触れたい」など4項目で、7件法で測定し、得点化した。得点が高いほど肯定度が高いと考えた。

(3) 心理社会的発達

医療保育科学生の心理社会的発達は日本語版 EPSI (エリクソン心理社会的段階目録調査 Erikson psychosocial stage inventory)¹⁹⁾を使用し測定した。全56項目を5件法で評定させ、得点化した。こちらも得点が高いほど心理社会的発達が高いと考えた。

4. 分析方法

(1) 医療保育科学生の子どものイメージ総得点、子ど

もイメージ3因子、子どもへの親和感情について、入学時、保育所実習後、施設実習後、選択実習後、小児病棟実習・発達障害児保育実習後の6時期でいかに変化したか明らかにするため、時期を被験者内要因とする1要因の分散分析を行なった。

(2) 同様に心理社会的発達各実習後いかに変化したか明らかにするため、時期を被験者内要因とする1要因の分散分析を行なった。

Ⅲ 結 果

(1) 子どもイメージについて

1) 子どもイメージ総得点については、図1のように、調査した6時期で有意な差がみられた($F(5,350)=19.17, p<0.01$)。Bonferroni法による多重比較の結果、入学時よりも保育所実習後、選択実習後、幼稚園実習後、小児病棟実習・発達障害児保育実習後は総得点が上がっていた。しかし施設実習後は保育所実習後、選択実習後、幼稚園実習後よりも総得点が下がっていた。また小児病棟実習・発達障害児保育実習後は選択実習後、幼稚園実習後よりも総得点が下がっていた。総得点が高いのは選択実習後と幼稚園実習後、低いのは施設実習後と入学時

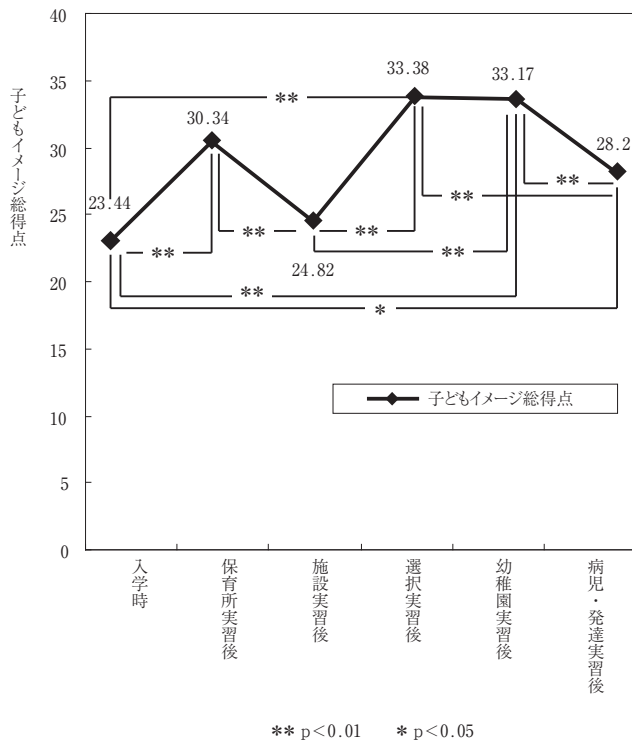


図1 各実習後の子どもイメージ総得点

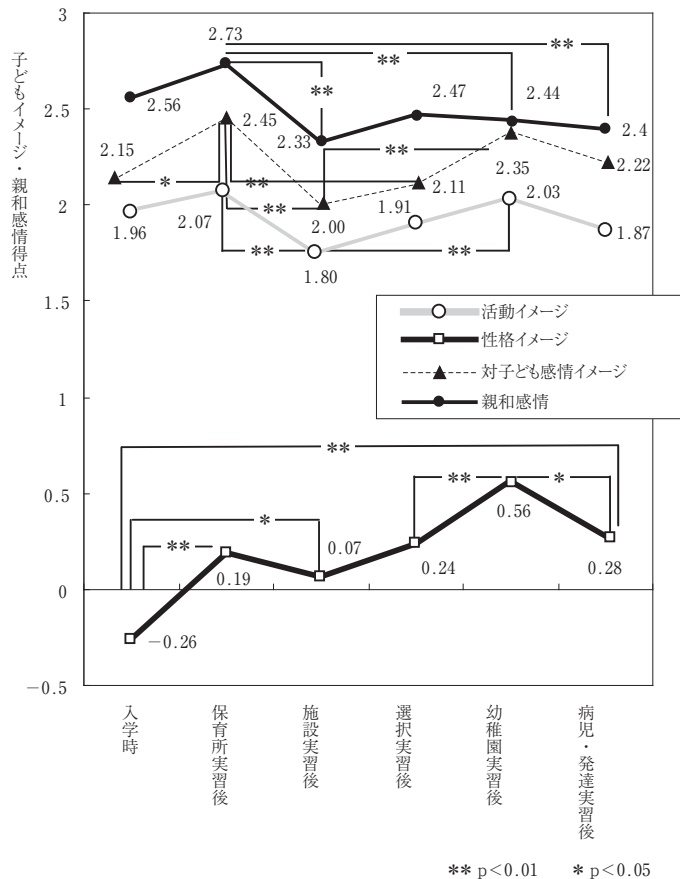


図2 各実習後の子どもイメージ得点と親和感情得点

であった。

2) 子どもの活動的イメージ因子Ⅰも、図2のように6時期で有意な差がみられた($F(5,350)=3.53, p<0.01$)。Bonferroni法による多重比較の結果、施設実習後は、保育所実習後、幼稚園実習後よりも得点が下がっていた。入学時と小児病棟実習・発達障害児保育実習後を比較すると得点は変化がなかった。

3) 子どもの性格に関するイメージ因子Ⅱも、図2のように6時期で有意な差がみられた($F(5,350)=17.65, p<0.01$)。Bonferroni法による多重比較の結果、入学時よりもすべての実習後で得点は上がっていた。幼稚園実習後は入学時、保育所実習後、施設実習後、選択実習後、小児病棟実習・発達障害児保育実習後よりも得点が高かった。入学時と卒業時の小児病棟実習・発達障害児保育実習後を比較すると得点は高まっていた。

4) 対子ども感情イメージ因子Ⅲも、図2のように6時期で有意な差がみられた($F(5,350)=6.29, p<0.01$)。

Bonferroni法による多重比較の結果、保育所実習後は

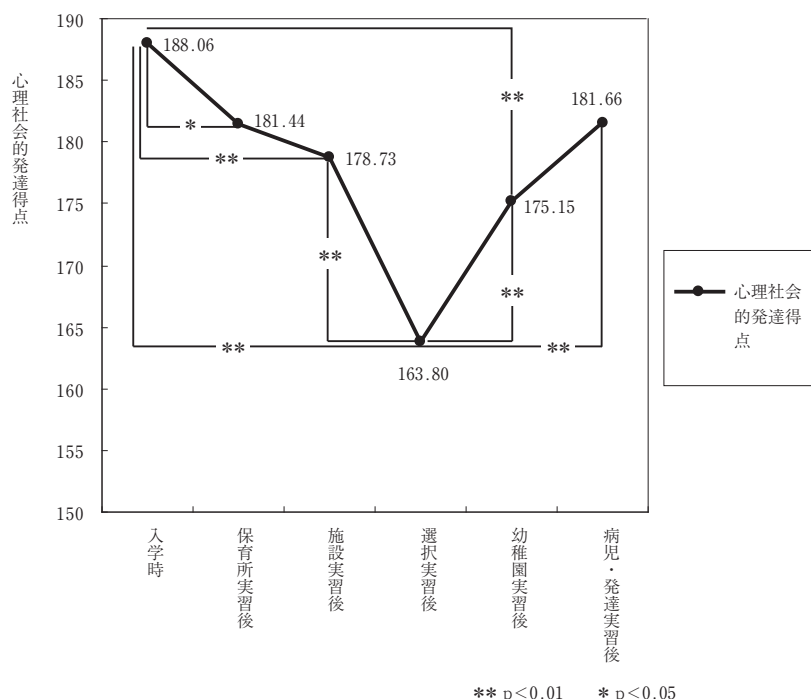


図3 各実習後の心理社会的発達得点

入学時、施設実習後、選択実習後よりも得点が高かった。施設実習後は保育所実習後、幼稚園実習後よりも得点が低かった。入学時と卒業時の小児病棟実習・発達障害児保育実習後を比較すると得点は変化がなかった。

(2) 子どもへの親和感情について

子どもへの親和感情も、図2のように6時期で有意な差がみられた ($F(5,350) = 3.93, p < 0.01$)。Bonferroni法による多重比較の結果、保育所実習後よりも施設実習後、幼稚園実習後、小児病棟実習・発達障害児保育実習後は得点が低かった。入学時と卒業時の小児病棟実習・発達障害児保育実習後を比較すると子どもへの親和感情は変化がなかった。

(3) 心理社会的発達について

1) 心理社会的発達総得点についても、図3のように6時期で有意な差がみられた ($F(5,350) = 15.86, p < 0.01$)。入学時に比べ、保育所実習後、施設実習後、選択実習後、幼稚園実習後は低かった。2年次の選択実習後が最も得点が低かったが、その後幼稚園実習後、小児病棟実習・発達障害児保育実習後は上昇した。入学時と卒業時の小児病棟実習・発達障害児保育実習後を比較すると変化はなかった。

IV 考 察

本研究により医療保育科学生の実習後の子どもイメ

ージ、子どもへの親和感情の変容を全体的にみると、保育所実習や幼稚園実習の後は子どもイメージ総得点や子どもイメージ3因子、子どもへの親和は肯定度が高く、逆に施設実習後、小児病棟実習・発達障害児保育実習後は肯定度が低くなることを見出された。

子どもイメージの変化については他の養成校においても、先行研究で保育所実習前後や教育実習前後などに多く調査され、戸田他¹⁴⁾、松永²⁰⁾は、初めて現場で保育と向き合うことになる保育所実習でそれらが肯定的に変化することを明らかにしている。本調査でも同様に、保育所実習や幼稚園実習の後は肯定度が高くなった。これはイメージ通り活発で健康な子どもた

ちに関わり、実際に保育を体験した結果、自ら保育の楽しさを感じ取り肯定的な子ども理解が進んだためと思われる。

逆に、施設実習後はそれらの得点が有意に下がることが示された。子どもの活動面に関しては、障害系施設で出会った障害のある子どもたちや養護系施設である児童養護施設の小学生・中学生・高校生など高年齢児童、生活課題をかかえた児童の活動性は、元気な保育所の子どもたちと比べると概して低く感じられたのではないだろうか。対子ども感情イメージも子どもへの親和感情に関しても、施設実習では自分では対処しきれないようなさまざまな問題や障害をかかえた子どもたちの理解や支援活動に戸惑いを感じ、保育所の乳幼児に比べるとかなり親近感がもちにくかったことが、否定的に影響を及ぼした可能性が考えられる。

医療保育科学生の施設実習後の感想にも「子どもとのやり取りや先生への気遣いで精神的には辛かった。」「あまり自分から積極的にはできなかった。」「困難に思うことや利用児の気持ちをつかみきれないことなどがあった。」「子どもとの関わり、先生との関わりの中で自分にとって納得できないことがたくさんあって、実習自体は不満がけっこうある。」「何をすればよいのか分からず困ることが多くあった。利用児とのコミュニケーションが難しかった。」「保育所実習の時より何をすればよいのか分からないときがあった。」「子ども

にとっても職員にとっても雑用係でしかなかった。」
「もう少し子どもと関われたらよかった。」などのよう
に十分自分の力が発揮できなかった感想がみられた。

音山・今泉²¹⁾によると、保育科学生は、児童福祉施設等になじみがなく、イメージがつかみにくいため、弱々しいとかこわいといったマイナスのイメージが先行し、施設実習中もさまざまな不安を持つ。それが否定的に影響したと思われる。

その後の選択実習、幼稚園実習では子どもイメージはおおむね肯定度が上昇した。選択実習において、本研究の有効対象者71名の中で保育所実習を選択した医療保育科学生46名と施設実習を選択した25名の選択実習後の子どもイメージ総得点、3因子得点、子どもへの親和感情を比較した結果、表1のようになり、子どもの活動イメージ因子Ⅰと対子ども感情イメージⅢは、保育所実習選択者の方が有意に高かった（それぞれ $t(69)=3.19, p<0.01$ と $t(69)=2.57, p<0.05$ ）。このことからやはり健康な子どもと関わる保育所実習の方が、子どもの活動性を高く感じ、実習自体も子どもと楽しく行え、子どもに対するかわいらしい、好きな、良いという感情面のイメージも肯定的になりやすいことが示された。

最後の実習である小児病棟実習・発達障害児保育実習後は、幼稚園実習後より子どもイメージ総得点は低下した。健康障害や発達障害など特別なニーズのため、さまざまな配慮や支援を要する小児病棟、発達障害児施設利用児の実態は、保育所や幼稚園で接する元気な幼児の実態とは違う。本来は元気で活発なはずの子どもが病気のためベッド上でぐったりしていたり、安静にし、つらい治療を受けていたりする姿を目にする。また発達障害のためコミュニケーションがとりにくかったりするなど、初めてかかる医療保育科学生はさまざまなショックや不安を感じ、そのことが得点の

低下に影響を及ぼした可能性がある。

ところで心理社会的発達をみると、入学時より得点の下がり続け2年次12月の選択実習後が最も低かった。短期大学生にとって入学後のこの時期は青年期後期にあたり、Erikson の発達理論では同一性が発達課題である。入学以来1、2年次で心理社会的発達が低下し続けた原因として、自らが何者であり自分が何にコミットする者であるのかをはっきり見通すことのできる高み²²⁾にまでいたっておらず、入学という新しい環境に入り、自分を見つめ直したり友人関係や親子関係を問い直している、職業的自己概念が確立途中で3年次を前に不安を持っているなどの理由²³⁾が考えられる。この時期の学生自身にさまざまな葛藤があったと思われる。

一方同時期の医療保育科学生の子どもイメージ総得点は施設実習後よりも有意に上昇している。子どもイメージ総得点がありに低下した施設実習後や小児病棟実習・発達障害児保育実習後も心理社会的発達は有意に低下することはなく、逆に小児病棟実習・発達障害児保育実習後の心理社会的発達得点は高くなっている。これらのことから子どもイメージや子どもへの親和感情は実習先の対象児の状態や、特質、子どもとの親近感に左右されている可能性があるが、心理社会的発達はこうしたこととはあまり関係がなかったと考えられる。

Erikson が人間の成長は、内的・外的な葛藤を乗り越え、危機を克服するたびに内的統一性感の増大、善き判断の増大、能力の増大という連続的な段階がもたらされ、そこから生まれてくると述べている²⁴⁾が、この結果からも医療保育科学生の心理社会的発達は、未知の実習でもどれだけ自分が頑張りをやり抜いたかが影響したと考えられる。医療保育科学生の施設実習後に書いた感想には「困難に思うこと、利用者の気持ちを

表1 選択実習における保育所実習選択学生と施設実習選択学生の比較

	保育所実習選択学生 n=46		施設実習選択学生 n=25		t 値
	Mean	SD	Mean	SD	
子どもイメージ総得点	35.67	13.91	29.16	14.28	1.87
子どもの活動的イメージ因子Ⅰ	2.05	0.45	1.65	0.58	3.19**
子どもの性格に関するイメージ因子Ⅱ	0.23	0.73	0.25	0.57	0.11
対子ども感情イメージ因子Ⅲ	2.27	0.57	1.82	0.92	2.57*
子どもへの親和感情	2.61	0.95	2.2	0.87	1.77

** p<0.01

*p<0.05

つかみきれないことなどがあったが、さまざまな活動を経験し技術をみがき貴重な経験ができた。」「一日一日の実習を行うことで精一杯だった。」「ものすごく辛い10日間だったが一日一日を一生懸命過ごしたので達成感はある。」「10日間大変だったけど頑張って乗り切ることができた。」「最初は戸惑うこともあったが、援助を行っていくうちにだんだんと自信がついた。」「利用者と多くかかわることができたし、新しい世界を体験することができた。」「戸惑うことばかりだったけど、新しく知ったことや学んだことがあった。」などの記述が見られた。さまざまな戸惑い、葛藤があったが、この状況に挑戦し根気強く実習をやりぬいた結果、多くの医療保育科学生が達成感、満足感を感じた。このことが心理社会的発達に低下しなかったという結果につながったのではないと思われる。

本研究では、健康な子どもと関わる実習では医療保育科学生の子どもの観は肯定的になるが、健康障害、発達障害、生活課題などさまざまなニーズをかかえ、特別な配慮や支援を要する子どもたちと関わる実習では子どもの観は肯定度が下がる傾向にあるが見出された。これらのことから医療保育科学生の子どもの観や親和感情は、まだまだ関わる対象の特質や状態などの現実面に左右されていることがうかがえる。しかし、心理社会的発達は必ずしも同じではないことが示された。

医療保育科においては今日ニーズの高い健康障害、発達障害のある子どもたちに関する幅広い知識を有し、個々の病状、発達障害、発達段階、生活課題、特性等の異なる子どもたちをより理解し、専門的な支援を行なう保育士の養成が求められている。保育士が行なうそれぞれの子どもに応じた発育・発達を促しつつ行なわれる支援は、保育士が子どもについてどのような捉え方をしているかという保育士の子どもの観に基づく具体的な行動であると思われる¹¹⁾。したがって医療保育科学生が在学中の3年間にさまざまな実習を体験することで、子どもの理想面ばかり見るのではなく厳しい現実を知り得たことは重要なことである。その上で、子どもに対する理解や共感がさらに広がり、最終的には子どもの受容や保育の質に影響する子どもの観の肯定度や子どもへの親和感が高まっていくことが望ましいと思われる。

本調査では在学中の医療保育科学生の変容をみるひとつの指標として保育士にとって重要な子どもの観や子どもへの親和感情の変化を調査、考察したが、それで計れるのは医療保育科学生の変容のほんの一部であ

る。しかし全体像としてみる時、卒業時には入学時よりも医療保育科学生の子どものイメージ総得点は肯定度が高まっていた。ここに医療保育科の3年間のさまざまな実習や養成教育の成果や医療保育科学生の子どもの観の成長が表れていると考えてよいのではないだろうか。

V 謝 辞

本研究を行うにあたり、ご協力をいただきました学生の皆さんに心から感謝いたします。

VI 文 献

- 1) 小河晶子, 樟本千里, 岡田恵子, 鎌野智里: 新入短大生の職業意識と専門選択の動機に関する研究 — 第一看護科, 介護福祉科, 医療保育科の比較を通して —, 川崎医療短期大学紀要25: 51—56, 2005.
- 2) 伊藤智里, 小河晶子, 樟本千里, 岡田恵子: 保育所実習前後の就業自己イメージの変容, 川崎医療短期大学紀要26: 113—116, 2006.
- 3) 岡田恵子, 小河晶子, 樟本千里, 伊藤智里: 居住型児童福祉施設等における実習前後の就業自己イメージの変容 — 保育所実習前, 保育所実習後, 居住型児童福祉施設等における実習後の比較を通して —, 川崎医療短期大学紀要27: 53—58, 2007.
- 4) 岡田恵子, 小河晶子, 樟本千里, 伊藤智里: 保育者の就業自己イメージの変容 — 幼稚園実習前後の就業自己イメージの比較 —, 川崎医療短期大学紀要27: 59—63, 2007.
- 5) 樟本千里, 小河晶子, 岡田恵子, 伊藤智里: 就業自己イメージと専門選択の動機に関する研究 — 保育者養成校における比較 —, 川崎医療短期大学紀要26: 105—111, 2006.
- 6) 岡田恵子, 中新美保子, 谷原政江: 医療保育科学生と看護科学生における入学時の子どものイメージの比較, 川崎医療福祉学会誌16(1): 179—183, 2006.
- 7) 岡田恵子: 医療保育科学生の保育所実習前後の子どものイメージ, 心理社会的発達の変化とこれらの関連性, 川崎医療福祉学会誌16(2): 377—384, 2007.
- 8) 岡田恵子: 保育科学生の施設実習における生活支援に関する自己効力感と実習達成感との関連 — 障害系施設と養護系施設との比較を通して —, 川崎医療短期大学紀要28: 65—70, 2008.
- 9) 神垣彬子, 入江慶太, 笹川拓也, 宮津澄江: 本学医療保育科病児保育コース学生の学びに関する研究Ⅰ — 「医療」に関するイメージの変化からみる実習および学内指導の効果の検証, 川崎医療短期大学紀要29: 71—77, 2009.
- 10) 入江慶太, 神垣彬子, 宮津澄江, 笹川拓也: 本学医療保育科病児保育コース学生の学びに関する研究Ⅱ — 小児病棟実習を通じた「チーム医療」「医療保育」の理解の変容 —, 川崎医療短期大学紀要29: 79—84, 2009.
- 11) 菅眞佐子: 子ども観の形成に関する研究 — 専門教育を受けることで子どもイメージはどう変化するか —, 滋賀大学教育学部紀要52: 85—94, 2002.

- 12) 菅沼真樹：人はどのような老人観・子ども観を持っているのか ― 青年期女子を対象とした探索的研究 ―，立教大学心理学研究45：51—63，2003.
- 13) 河上智香，藤原千恵子，上野恵美子，谷口佳生理：4年制看護系大学の学生が持つ子どもイメージの構造，看護研究36：103—106，2003.
- 14) 戸田まり，大滝まり子，佐藤信雄：保育実習による学生の子どもイメージの変化，日本発達心理学会第11回大会発表論文集：137，2000.
- 15) 水島恵一：人間性心理学体系 第9巻 イメージ心理学，東京：大日本図書，pp. 41—45，pp. 325—327，1990.
- 16) 中新美保子，谷原政江，長江宏美，大場広美，太田にわ，砂田正子，山口三重子，留田通子，福山礼子：看護学生の心理社会的発達 ― 看護大学生・看護専門生・非看護系学生の比較 ―，川崎医療福祉学会誌15(1)：289—293，2005.
- 17) 中新美保子，田中七恵，山本玉起，難波千恵子，田村千代美，谷原政江，砂田正子，磨家敦子，小野ソルコ：看護学生の自我の発達の度合いと実習充実度 ― 小児に対するイメージ，親和度との関連から ―，平成5年度日本看護協会中国四国地区看護研究学会収録：88—93，1993.
- 18) E・H・エリクソン：アイデンティティ 青年と危機，岩瀬庸理訳，第9版，東京：金沢文庫，p. 16，1973.
- 19) 中西信男：人間形成とライフサイクル，中西信男編，第11版，京都：ナカニシヤ出版，pp. 83—84，1989.
- 20) 松永しのぶ，坪井寿子，田中奈緒子，伊藤嘉奈子：保育実習が学生の子どもの観，保育士観におよぼす影響，鎌倉女子大学紀要9：23—33，2002.
- 21) 音山若穂，今泉礼右：児童福祉施設実習生の心理的ストレス反応の変化と自己評価，刺激事態の検討，保育士養成研究19：15—27，2001.
- 22) E・H・エリクソン，J・M・エリクソン：ライフサイクル，その完結，村瀬孝雄，近藤邦夫訳，第3版，東京：みすず書房，p. 158，2003.
- 23) 後藤宗理：児童・青年・成人の発達の特徴，改訂・保育士養成講座2006 第3巻 「発達心理学」，改訂・保育士養成講座編纂委員会編，第2版，東京：社会福祉法人全国社会福祉協議会，pp. 140—149，2006.
- 24) 前掲書18) pp. 114—115.

